

意味論は真理条件を確保できるか

青山晋也
京都大学

本発表の目的はDavidson的立場から、二つの提案を行い、意味論が真理条件を扱うという立場を保持しながらも、発話の解釈プロセスにおいて意味論が果たす役割を確保する一つの方法を提示することである。

意味論-語用論論争において、意味論擁護派のBachは意味論が解釈プロセスで果たす役割を確保するために、意味論から真理条件を与えるという役割を取り除いた。また意味論排斥派のRecanatiはそもそも解釈プロセスにおいて意味論が果たす役割を認めない。このような異なる立場に立つこの二人に共通するのは、意味論を静的なものとして理解している点である。これに対してDavidson的立場からの一つ目の提案は意味論を（以下の意味で）動的なものとして理解するというものである。そして、二つ目の提案は意味論を個人の発話の解釈の仕方に対して与える、というものである。これは一つ目の提案を実現するために提案される。

後期Davidson哲学では、ある言語共同体のメンバーが共通して習得するような一般的な言語は想定されず、存在するとされるのは個人がそれぞれ持つ個人言語のみである。このような言語観において、意味論は個人言語に与えられるものであり、それは個人の発話の解釈の仕方を描き出すものとされる（二つ目の提案）。こうした意味論は、(1)個人言語に与えられるものであるゆえ個人によって異なり、(2)発話の解釈の仕方を描くものであるから、発話ごとにより変りうるものである（一つ目の提案）。したがって、通時的な意味では、一般的で静的な意味論というものは存在せず、Davidson的立場はそうした意味論を想定する意味論擁護派の論者には批判的な立場に立つことになる。しかし他方、共時的な意味では、語用論的プロセスによって準備・変更される意味論は各発話の入力に対して、実効的に真理条件的な解釈を出力するものである。したがって、共時的な観点においては、いったん発話が入力されれば、意味論が発話の（暫定的）解釈を出力する過程に語用論的プロセスは関わらないため、Davidson的立場は意味論擁護派に接近することになる。

本発表では、Bachの解釈プロセスでは意味論が真理条件を与えない事例に対して、Davidson的な（意味論に真理条件を与える役割を担わせる）枠組みでも、うまく意味論によって真理条件を与えることができることを示す。またRecanati解釈プロセスでは直観に反する結果をもたらす事例に対して、意味論に役割を与えるDavidsonの枠組みの方がうまく私たちの発話理解を説明できることを示す。これにより、真理条件を与える意味論に役割を与えるDavidson的立場が持つ可能性を描き出す。